Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-18

源氏物語論－制度論的研究の実践－

井出，千春

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2010-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲4849
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004849

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

氏　　名	井出　千春
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学　位　記　番　号	博い第 4849 号
学位授与の　要　件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の　日　付	平成 22 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

源氏物語論－制度論的研究の実践－

審　査　委　員

主　査　　教　授　福長　進
　　教　授　林原　純生
　　教　授　市澤　哲
　　准教授　田中　康二
　　准教授　樋口　大祐

博士論文要旨

第一章では、『源氏物語』における喪中の結婚について論じた。『源氏物語』に描かれる女君たちの生き様には、「父母をはじめとした庇護者を失うことによって、男性に救済される」といった典型的な物語展開が多々見られる。例えば、藤壺は、入内に反対していた母の死をきっかけに桐壺帝に入内することになり（桐壺巻）、紫の上は、唯一の庇護者であった祖母の死により光源氏に引き取られることになった（若紫巻）。『源氏物語』は、庇護者の死を、女君の生き方を左右する結節点として位置づけているようだ。ただし、その死（もしくは死後の儀礼）の描写については、臨終・法要・服喪（除服）などを具に描く場合と、全く描かない場合がある。中でも物語に描かれる除服の例は七例と決して多くはないが、その内六例が、後見の不安定な女君の除服であり、かつ除服とその女君の結婚とが連接して語られているという特徴がある。本章では、儀礼研究においてこれまで扱われることのなかった除服という葬送儀礼に着目し、物語作者の背景にある喪中結婚のタブーをあぶり出すことを目的としたものである。

結婚と連接して除服を描く物語設定には、喪中の結婚をタブーとする観念が確認できよう。実際、律令でも喪中の結婚は罪だとされ（八虐）、史実でも、喪中の結婚の例が何例か確認できるものの、周囲からは非難の対象とされていた（小一条院と藤原寛子の喪中結婚の際の藤原実資の批判や、『元輔集』所収の喪中に結婚した女性に対する当てつけめいた和歌の贈答など）。史実を物語にそのまま適用はできないものの、『源氏物語』においても、できるだけ喪中の結婚を避けようとする意識は認められよう（喪中の結婚を避けようとするあまり、物語には不自然な時間の空白が生じる例もある・玉鬘の結婚の場合など）。ただし、こうした例に当てはまらない例がある。紫の上と光源氏の結婚と、落葉の宮と夕霧の結婚の場合である。前者では、光源氏が前妻葵の上の軽服中であり、後者の場合は落葉の宮が母一条御息所の重服中であった。この二例には、いずれも周囲には結婚を偽装・秘匿しようとする共通点があり、これらの例でも喪中結婚のタブーは守られているといえる。しかし、なぜこの二例の結婚があえて喪中に行わなければならなかったのか、そして、喪中の結婚であることでこの二例の結婚は物語においてどのように位置づけられるのか、との二点の課題が未だ明解を得られていない。この二点を解決することが今後の課題である。

第二章では、光源氏の邸宅六条院における人間関係について論じた。その人間関係の中には、「後見」という言葉で取り押さえられている関係性が多くみられる。まず、『源氏物語』において、「後見」と呼ばれる人間関係は、非血縁者間に使われることが多い。例えば、夕霧と、その姉にあたる玉鬘（実は、夕霧とは血の繋がりがないことが後に明かされる）の二人の関係は、夕霧が、玉鬘は実の姉でないことを知った後に、はじめて地の文で「後見」と呼ばれる（藤袴巻）。また、明石の姫君と、その実母・明石の君との関係は、姫君の東宮入内の際に、はじめて光源氏により「後見」と規定される（藤裏葉巻）。しかし、その「後見」の内実を見ると、明石の君の扱いは東宮妃の実母といったものではなく、女房扱いであり、入内の際、姫君の母として見なされたのは、養母の紫の上であった。よって、ここで明石の君が「後見」と呼ばれるのは、血の関係をあえて無視した形で明石の君と姫君の関係を位置づけたためだったのである。

このように、後見関係のほとんどが非血縁者間に適用される言葉だといえる（ただし、「朝廷の後見」と呼ばれる、臣下が天皇を補佐する公的な関係には、必ずしも血の関係がないとはいえない。例えば、臣下である光源氏から、兄であり天皇である朱雀帝への後見の場合など。）わずかな例外を除き、「後見」といった関係性は、血の関係を補完し、代替する関係として捉えられているものだと考えられる。六条院に住む人物間には、ほとんど血縁関係はなく、その代わりに敷設された関係が後見関係であるといえ、そうした六条院の人間関係の特質を明らかにしようとするのが、本稿の目的であった。

まず、第一節では、光源氏の妻花散里と、光源氏の子夕霧との後見関係について考察した。この二人の後見関係は光源氏により規定された（少女巻）。しかし、花散里が夕霧を後見している場面はほとんど見当たらない。むしろ、反対に、夕霧が花散里を後見していると思われる場面が多く見られる（つまり、この時点での二人の後見関係は単一方向の後見関係である）。しかも、花散里の経済的庇護をしていた光源氏は、夕霧と花散里に後見関係を結ばせた後、これまでのように花散里を庇護（後見）する場面が見られなくなる。つまり、光源氏の花散里への後見関係の解消と、花散里と夕霧の後見関係の敷設は不可分の関係にある。

野分巻で、夕霧から花散里への一方的な後見関係に転機が訪れる。ここで、光源氏は花散里に夕霧への衣装の贈与を命じる。従来、衣装の贈与は、妻から夫への後見の典型的な行為と把握されてきた。しかし、『源氏物語』や、当時の物語の用例を見ると、必ずしも妻のみの役割だとは言えず、親から子への贈答の例なども散見する。つまり、衣装の贈与（用意・調製）といった行為は、妻・親を含む「後見」の役割だと規定できる。よって、光源氏が花散里に夕霧への衣装の贈与を命じることは、これまで夕霧から花散里に対する単一方向であった後見関係に、花散里から夕霧に対する後見をも加え、双方向的な後見関係へと据え直す行為であった。また、同じく野分巻には、夕霧が花散里の邸を修復する行為が語られる。かつて光源氏が花散里の邸を修復していた（須磨巻）ことから考えれば、邸宅の修復・修繕といった行為も後見の役割の一つだと考えられ、花散里への後見の役割が光源氏から夕霧へと移行していることが確認できる。

第二節では、花散里と夕霧の後見関係以外の、六条院の後見関係について論じた。光源氏は、自らの亡き後を懸念して、六条院に住む人物間の後見関係を規定していくことがしばしば見られる。そうした意図は、六条院という家を永続させていくことに主眼があるのだが、本節では、光源氏の企図した後見関係を個々に分析した。

光源氏は自身の亡き後、秋好中宮と明石の姫君は紫の上を、また秋好中宮は明石の姫君を、夕霧は花散里を、また夕霧は明石の姫君をそれぞれ後見し支えることを想定しており、後見関係は、網の目状に、重層的に張り巡らされていることがわかる。また、一対一の後見関係を基本として、次々に後見関係が派生していくのも六条院の後見関係の特徴である。例えば、光源氏と秋好中宮に見られる双方向的な後見関係の樹立の後、秋好中宮は、光源氏の養女玉鬘や、実子の明石の姫君、薫といった光源氏ゆかりの人物へ後見をしており、その関係性を広げていく。また、紫の上と明石の姫君の後見関係も、紫の上が姫君の子である女一の宮や匂宮を養育することへと繋がったり、花散里が夕霧の子の三の君や二郎君を養育したりするように、その枠組みが広がっていくのである。このように派生した後見関係は、その多くが血縁とは無縁の関係性でありながら、継子の軋轢等のない円滑な人間関係が構築されており、六条院の人間関係がいかに希有なものであるかがうかがえる。

また本節において分析を加える際に、必ずしも物語中に「後見」という言葉で呼ばれない人間関係も検討の対象とした。「後見」という言葉の用例に止まらず、後見関連語彙を検討することで、後見関係を認定した。検討した後見関連語彙とは、動詞「ゆづる」「数まふ」である。特に、「ゆづる」は、後見に関する研究において、ほとんど注目されてこなかった語彙であるが、『源氏物語』の用例を検討すると、この言葉の多くは、後見の役割を譲渡するという文脈で用いられることがわかった。こうした語彙をも後見関係の認定に用い、従来「後見」という言葉のみで論じられてきた先行研究よりも、その枠組みを緩やかに把握することで、六条院の人間関係を捉えた。（また、本論文発表後、倉田実氏「平安朝の移動する子どもたち―『源氏物語』の養子縁組」（『女と子どもの王朝史』服藤早苗編・森話社・二〇〇七年）が管見に入った。ここで、倉田氏は、「ゆづる」を「養子縁組成立を示す語彙・用語」の一つに数えている。しかし、この「ゆづる」は、私的な後見関係の譲与の他、「朝廷の後見」（天皇の補佐役）を委譲する際にもしばしば用いられており、「養子縁組」のみを指すとするよりも、養子関係も含む後見関連語彙とした方が適切ではないかと考えている。）

第三節では、光源氏が企図した、六条院の中の血縁関係に依らない人物間の後見関係の祖型を、桐壺朝のキサキたち（藤壺・弘徽殿女御・麗景殿女御など）と光源氏の関係性にみた。かつて桐壺帝は積極的に、母のない光源氏とキサキたちの親近を促した（桐壺巻）。桐壺朝の御代では、光源氏が具体的にキサキたちを後見する姿は描かれないが、藤壺立后を契機として、まず藤壺への後見が見られる（紅葉賀巻）。また、桐壺崩御後、麗景殿女御の経済的庇護をし（花散里巻・須磨巻）、須磨退去を経て政権に復帰後、自らの政敵ともいえる弘徽殿女御に対しても、懇ろに奉仕している（澪標巻・少女巻）。このように、桐壺帝死後に、光源氏によるキサキたちへの後見が見られることは、おそらく桐壺帝の遺志によるものだと考えられる。つまり、桐壺帝は、幼少期にはキサキたちが光源氏の後見をし、成人後、桐壺帝が崩御した後には、反対に光源氏がキサキを後見するといった関係を構想していたものではないかと推測できる。

また、光源氏が後見したのは、桐壺朝のキサキだけではなかった。桐壺帝の妹の女五の宮や大宮、また、桐壺帝とは血縁関係はないが、帝の皇子たちと同列に扱われていたという秋好中宮などへの後見を見れば、光源氏は、桐壺ゆかりの女性たちを後見してきたことがわかる。

第二節で述べたように、光源氏は、自らの亡き後を想定して、着々と六条院内の後見関係を構築していった。こうした姿には、桐壺帝の企図したものとの類似が認められる。六条院において、かつての光源氏の立場にあるのは、夕霧である。夕霧は第一節で述べたように、花散里への後見の他、光源氏の妻である紫の上や女三の宮、また光源氏の養女である秋好中宮や玉鬘、また異腹の妹である明石の姫君への後見もしている。こうした後見は、夕霧が自発的に行ったものではなく、花散里との後見関係の場合のように、光源氏が企図したものであったことが推測される。つまり、光源氏が六条院の人間関係を形成する上で、先例としたのが、桐壺帝により自らが課せられた父帝ゆかりの女性たちとの後見関係であると考えられる。このように、桐壺帝・光源氏・夕霧と三代に渡って、後見という扶助システムが受け継がれていることを確認した。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	井出　千春
論文題目	源氏物語論――制度論的研究の実践――

要　　旨

本論文は、本論文提出者の『源氏物語』研究の軌跡を反芻する「序」、本論文の内容を要約し今後の課題を提示する「結」を除いて、本論は、第一章「『源氏物語』における喪と結婚――除服を中心として――」、第二章「六条院の後見関係」、第三章「玉鬘十帖の意義――光源氏家と内大臣家の「家」の物語として――」からなる。以下、各章の内容を紹介し、若干のコメントを付す。

第一章は、『源氏物語』には多くの死が描かれ、先立たれた者の服喪も３３例と多く触れられているが、喪が明け、喪服を脱ぐ、いわゆる除服が語られるのは７例で、そのうち６例までもが、しっかりとした後見のない姫君の除服であり、かつ除服と結婚とが関連づけられて新たな物語が紡ぎ出されていく様相を的確に取り押さえる。他方、律の八虐の規定をはじめとして、『源氏物語』と同時代の『小右記』の記事を参照しながら、喪中の結婚がタブー視されていたことを明らかにするとともに、『源氏物語』においても、喪中が結婚拒否の口実とされていること、あるいは玉鬘の尚侍出仕や前斎宮の入内に見られるように、新たな展開を用意するにあたって服喪期間を織り込んで「時間（物語）の空白」を設けているのに注目して、喪中結婚を忌避するタブー意識を析出する。しかし、にもかかわらず、『源氏物語』において、光源氏と紫上の結婚や、夕霧と落葉宮のそれに見られるように、異例の喪中の結婚が描かれてもいる。この二つの異例に着目して、物語の論理とタブー意識の相克を物語テクストに密着しながら跡づけている。すなわち、前者の場合はその結婚を世間に隠蔽し、後者は世間に対して故人の遺言があったことを強調することによって、タブー意識に基づく世間の非難を回避する措置が講じられているとする。そして喪中結婚というタブーに触れることは、『源氏物語』がその基底に「女性は生きづらい」というテーマを据えて、繰り返し執拗に追求していることと無縁ではないことを付言している。行論は安定しており、説得的でもある。『源氏物語』において繰り返されるテーマを喪中結婚という切り口でもって鮮やかに照らし出している。『源氏物語』にあまた導入される人生儀礼の意義を照射し、『源氏物語』研究の新展開をも予感させる。

第二章は、『源氏物語』において光源氏を中心にして形づくられる人間関係は、血縁関係を補完するかたちで重層的に非血縁的「後見」関係が張り巡らされていることを明らかにしている。従前の後見に関する研究は、「後見」という用例のみこだわってきたが、「ゆづる」「数まふ」などといったことばにも注目して、後見の内実をより豊かに掘り起こすのに成功している。新見は以下の通りである。

① 夕霧と花散里の後見関係を検討し、はじめは光源氏の委託を受けて、花散里が夕霧を庇護する関係であったが、物語の展開に伴って、花散里が夕霧に衣装を贈与する一方、夕霧は花散里のために邸宅の修繕に奉仕するという、双方向的な後見関係へと光源氏によって据え直されていることを跡づける。

② 光源氏は自身の薨後を考えて、秋好中宮および明石の姫君が紫上を、秋好中宮が明石の姫君を、夕霧が花散里を、夕霧が明石の姫君をそれぞれ後見し支えることを想定していることを明らかにし、六条院における後見関係が複雑に重層的に張り巡らされている実態を照らし出している。

③ 光源氏が薨後を考えて重層的な後見関係を構築するのは、桐壺朝のキサキたちを光源氏自身が後見してきた経験に基づくことを明らかにしている。

主査記載氏名・印	福長　進

『源氏物語』の後見論を前進させた功績は認められるものの、なお用例に基づく後見関係の析出に終始している。たとえば後見関係によって充足される光源氏的世界が、光源氏の人生史の始発において身内に先立たれて、唯一の庇護者が父帝であったとする物語の敷設とどのようにあいわたるのか、といった解決すべき諸問題は顧みられていない。その点で物足りなさを感じる。

第三章は、玉鬘十帖をどのように位置づけるか、その試論である。玉鬘十帖は、玉鬘を中心とする恋物語の性格を持ちながら、玉鬘を媒介に光源氏家・内大臣家・式部卿宮家の各家の問題が相対的に照らし出されている機微を的確に掴んでいる。玉鬘十帖のはじめの巻々では年中行事が導入されて、光源氏の王者性を明らかにするのに対して、後には光源氏家と内大臣家との相対的関係のなかで物語は展開する。両者の対比は、子女の教育、両家の文化・風儀、夕霧と雲井雁の結婚問題をめぐって炙り出される。従前の研究成果を踏まえながら、それを批判的に接受して、一歩踏み込んだ議論を行おうとしているが、玉鬘十帖の内実と位相を十分とらえ切れていない憾みがある。

一見すると、各章、個別の関心によって個々別々にものされたという印象があるものの、実のところ、それぞれが相互に有機的に絡まって発展的に議論が深められている。用例やことばにこだわり、細緻に議論を押し進めており、議論に飛躍がないことが行論に安定感をもたらしている。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者、井出千春が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判断した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	福長　進	副査	教授	林原　純生
副査	教授	市澤　哲	副査	准教授	田中　康二
副査	准教授	樋口・大祐			